

【氏名】 鈴木 勝己

【所属大学院】(助成決定時)

千葉大学大学院 社会文化科学研究科

【研究題目】

「タイ・エイズホスピス寺院における死の看取りと証言：
多文化包括的な終末期ケアのあり方を問う医療人類学研究」

【研究の目的】

本研究の目的は、東南アジアタイのエイズホスピス通称パバナブ寺において、上座仏教の世界観と終末期医療ケアとの関連性を医療人類学の立場から考察し、エイズに関する社会文化的理解と多文化包括的な終末期ケアモデルを探求していくことであった。パバナブ寺では、エイズ病者は死期に際して仏陀と静かに対話することで現世最後の功德を積み、来世への転生に備えるべき、と考えられている。この考え方は、僧侶に代表される宗教エリートを対象とした世界観であり、エイズ病者のより人間的で多様な死に方を否定しているとも言える。エイズは生物医学的疾患であると同時に性的嗜好や貧困と関連する社会文化的文脈を内在させた病いであり、エイズ病者の生活世界は宗教的な価値規範だけに限定されないからである。実際にケアの現場ではエイズ病者への理解不足やタイ社会におけるエイズの意味づけの変遷、外国人ボランティアとの文化や習慣の違いから様々な混乱が確認された。

【研究の内容・方法】

調査者は2008年度2月から12月現在にかけてパバナブ寺のボランティア活動に従事し、医療人類学調査を実施している。具体的には(1)全数調査:僧侶、看護師、事務員、家政婦、病者、外国人ボランティアというコミュニティの構成員数を確認し、寺院ホスピスの規模を把握。(2)文献調査:パバナブ寺の広報資料と活動実績および在家信者の訪問数や寄付に関する情報を収集。(3)医学情報:パバナブ寺の全病者を対象としてエイズ合併症の診断名と抗 HIV 薬の薬品の種類や使用状況を資料化。(4)生活時間調査:僧侶、看護師、病者、外国人ボランティアの一日数時間ごとの行動をパターン化し、それぞれの病気とケアにかかわる日常生活の行動を資料化。(5)聴き取り調査:生活時間調査に基づき、コミュニティ成員のエイズの意味づけ、説明モデル概念(Explanatory Model、A.Kleinman、1988)、終末期ケアのあり方について質的な聴き取り調査を実施し、日常に意識する健康問題、感染者の受療行動、非感染者の予防行動を記録した。さらに病者に対して質問表を並行使用することによって健康に寄与する資源(Health Resource、A.Antonovsky、1987)の詳細を記録(2008年12月現在、実施中)した。(6)終末期医療ケアの参与観察:タイ人看護師と外国人医療ボランティアのケア活動を観察し、終末期医療に関する文化的軋轢を分析した。同時に調査者による病者へのマッサージ施療、入浴補助、投薬および食事補

助、末期患者の死の看取り、遺体の清拭、納棺という一連の終末期ケアに参加し、ケア活動を効果的に進めていくために必要となる、生きた知恵を自らの経験の中で理解した。(7)仏教儀式の参与観察:死者の葬儀や供養のための仏教儀礼の執行補助を通して、上座仏教寺院の年中行事が終末期医療ケアに対して果たす役割や意義について分析し、寺院内の定例儀式が僧侶による広義の医療行為とみなされることを明らかにした。

【結論・考察】

調査者は、パバナブ寺の錯綜した終末期ケアの状況を説明する以下の3項目を仮説として抽出した。(1)個人の多層的生命観:医学、上座仏教の功德と輪廻転生、外国人ボランティアのキリスト教的博愛、病者の日常感覚に基づく死生観は状況によって異なる生命観を生成し、終末期ケアに軋轢を生じさせる。ケアにかかわる人々の個々の立場から生命を再定義し、包括するケアモデルが必要。(2)エイズの社会文化的意味の変遷:薬剤開発によりエイズは致命的病気から慢性疾患化しつつある。タイ社会においても抑圧と差別から共生の道を模索し始めている。エイズの意味は性的少数者や薬物中毒者の不幸な死から予防と共生のあり方を学ぶ材料へと変化している。(3)病いの語り分析の課題:病いの民族誌としてエイズ病者を描き出す試みは、病者の視点から社会文化的苦しみへの迫り、ケアモデルの模索に貢献する。同時に言語化プロセスの課題、エイズという痛みの想像的共有の可能性と病い経験の困り込みは依然として残る。調査者はこれらの3つの仮説をさらに検証していく作業が必要と考えている。